

第2節 令和元年度 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 学生会館(仮称)新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内G-13区

調査面積 75m²

調査期間 令和元年11月25日～12月19日

調査担当 横山成己 水久保祥子

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真22・23)

令和元年度第4回埋蔵文化財資料館専門委員会(令和元年9月10日(火)開催)において、吉田構内正門南西側に位置する排水処理センター生活排水施設と廃棄物倉庫を解体撤去し、新たに学生会館(仮称)を建設する工事計画が財務部より提出された。

昭和53年(1978)に竣工した生活排水処理施設は、新営時に埋蔵文化財調査が行われていないが、処理水タンクや原水槽など地下2～6mにかけて構造物が多数設けられていることから、埋蔵文化財はすでに遺存しない状況が予想された。一方平成6年(1994)竣工の廃棄物倉庫は、建設時に立会調査が実施されたものの、現地表下60cmまで盛土を確認した^{註1}に止まっていたことから、廃棄物倉庫撤去後に、同地にて予備発掘調査を実施し、当該地の地下の様相を確認することが提案され、承認された。

【註】

1) 豆谷和之(1995)「環境整備(正門周辺)に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅢ』, 山口

(2) 調査の経過

解体・撤去作業が11月中旬に終了したことから、19日(火)に座標杭の設置作業を行い、21日(木)に調査区を設定した。25日(月)から27日(水)にかけて盛土の重機掘削を行い、28日(木)から29日(金)にかけて旧耕土および旧床土を掘削した。12月3日(火)より遺構検出を開始し、5日(木)に検出写真を

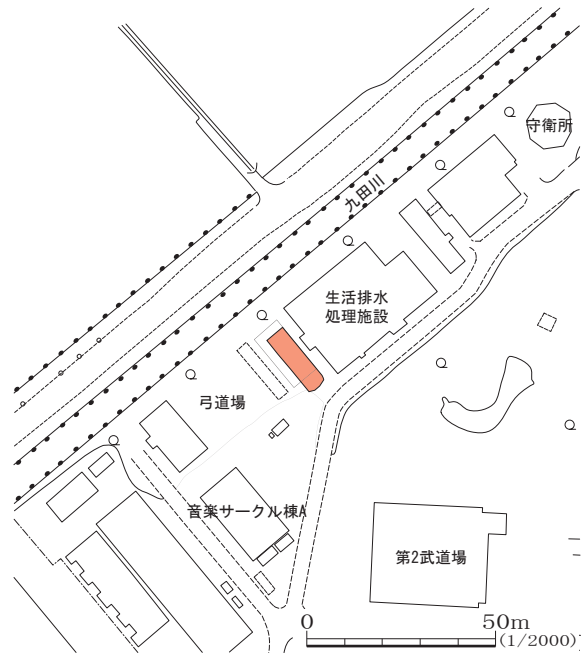


図4 調査区位置図



写真22 調査地近景(廃棄物倉庫撤去前)(南東から)



写真23 調査地近景(廃棄物倉庫撤去後)(南東から)

撮影した。6日(金)から遺構掘削を行い、10日(火)完掘写真を撮影、11日(水)と12日(木)の両日で測量作業を終え、同日より埋め戻しに着手した。その後雨天が続いたため埋め戻し作業は長期に及び、完了したのは19日(木)であった。

(3) 基本層序(図5、写真29～31)

調査地の現地表高は約18mとなっている。基本層序は上位から

0層 盛土(層厚約130cm)

1層 灰色(10Y4/1)細粒砂質粗粒シルト(層厚10cm)…旧耕土

2層 にぶい黄色(2.5Y6/3)極粗粒砂含む粗粒シルト(層厚5～10cm)…旧床土

3層 灰黄褐色(10YR5/2)粗粒～極粗粒砂含む粗粒シルト(層厚3～10cm)…調査区北西半部にのみ堆積

4層 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒～極粗粒砂含む粗粒シルト(層厚3～10cm)…調査区北西半部にのみ堆積

5層 黄褐色(2.5Y5/3)中粒シルト(層厚15cm以上)…遺構基盤層

6層 黒褐色(10YR3/1)細粒シルト(層厚10cm)…調査区南東半部にのみ堆積

7層 浅黄色(2.5Y7/4)中粒砂質細粒シルト(層厚40cm以上)…遺構基盤層

となっている。遺構は5層および7層を切り込み形成されている。7層は堅緻に締まっているが、わずかながら縄文土器片を含んでいたことから(写真31)、調査の終盤で上位層である5層および6層の掘削を行い遺構の検出に努めたが、遺構は検出されず、層中に遺物も確認されなかった。

(4) 遺構(図5、写真25～28)

暗渠

上述のように、遺構は2層、5層および7層の上面に形成されている。5層および7層の上面は標高およそ16.5mを測る。

2層(旧床土)上面を検出面とする遺構として、調査区のほぼ中央と南東端部に、本学移転前の耕作に伴う北東－南西方向の粗朶暗渠を確認した。中央部のものは上部幅約40cm、深さ80cm以上を測る。この種の暗渠は、山地を除く構内のほぼ全域で確認されている。

河川

5層および7層上面を検出面とする遺構として、調査区北西部に東－西方向の河川跡を検出した。一部を暗渠により破壊されるが、河川幅約280cm、深さ60cmの小河川で、埋土は7層に分けられる。このうち下層(河川埋土⑤～⑦)は水流堆積を示しており、上層(河川埋土①～④)は水流が滞り淀みとなった状況を示している。河底はほぼ平坦で、調査区の北西を南西方向に流れる九田川と同様に西流していたと思われるが、西端部河底高(標高15.92cm)より東端部河底高(標高15.88cm)がわずかに低いことから、地勢に逆らい東流していた可能性も考えられる。この場合は、人為的に設けられた水路である可能性が高まるが、検出した範囲内では、護岸杭など人工的な施設は確認されなかった。

遺物の包含は極めて希薄で、土器の小破片の他は、河底から弥生時代前期の土器底部が1点出土したに過ぎない(写真28)。周辺で実施した陸上競技場体育器具庫新営に伴う発掘調査^{註1}や第2体育館新営に伴う発掘調査^{註2}、公共下水布設に伴う発掘調査(令和5年3月刊行予定)での事例を参考にとすると、当河川も弥生時代に機能していた可能性が高いと考えられる。

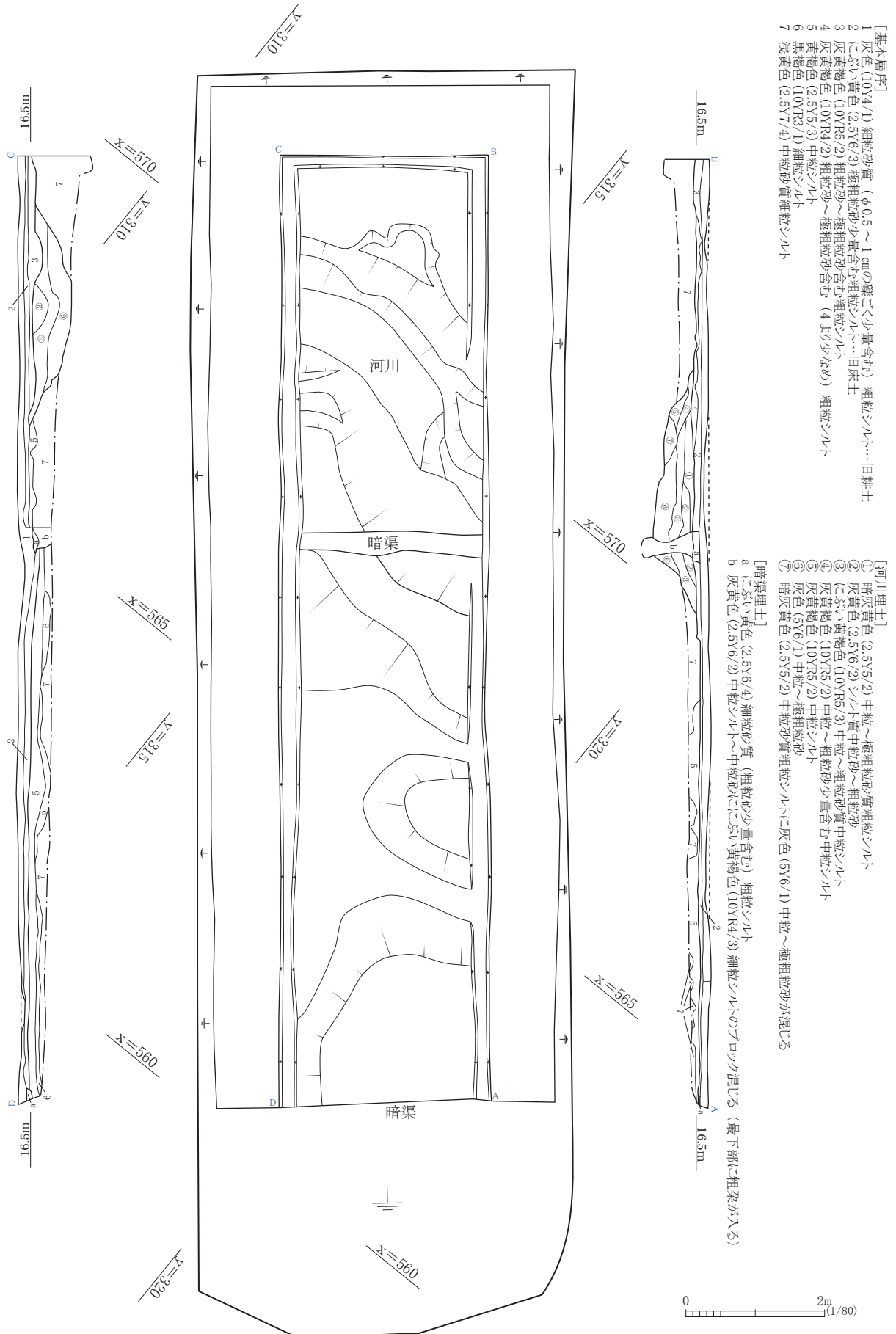


図5 調査区平面図・断面図

【註】

- 1) 横山成己(2018)「第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成25年度』, 山口
- 2) 村田裕一・中村仁美(2000)「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』, 山口

(5) 遺物(図6、写真32、表4)

図示可能な遺物は、検出された河川の河底から出土した弥生土器1点(写真28)のみである。

1は甕底部片で、弥生時代前期とみられる。底部はやや上げ底状を呈しており、体部は緩やかに外方に開き立ち上がる。内外面ナデ調整を施しており、内面には部分的に指押さえ痕が残る。

前述したが、河川が形成されている基本層序7層(堅緻な浅黄色シルト)中には縄文土器が含まれていた。いずれも小破片で、元来器面の風化、摩滅が甚だしかったことに加え、層中から取りあげる際にさらに剥離が進行したことから、図化や採拓が不可能であり、ここでは写真のみ提示する。2～4はいずれも粗製深鉢の体部小片とみられる。原面がほぼ遺存していないが、3の外面にはわずかに横位の条痕が残る。これらの小片は一定の範囲に分布していたことから、同一個体の可能性もある。

(6) 小結

吉田構内北西端部、正門の南西に所在する諸施設(特殊排水処理施設(昭和51年(1976)竣工)、排水管理棟(昭和53年(1978)竣工)、生活排水処理施設(昭和53年(1978)竣工)、弓道場(昭和46年(1971)竣工)、音楽サークル棟A(昭和47年(1972)竣工)、文化サークル棟A(昭和42年(1967)竣工)、第2武道場(昭和48年(1973)竣工)など)は、いずれも正式な埋蔵文化財調査を経ずに建設されており、わずかに平成22年度に計画された音楽サークル棟Bの新営時に予備発掘調査が実施され、遺物包含層の可能性のある堆積層と、河川または落ち込みを確認しているに過ぎない。今回の調査は、弥生時代の河川(水路)跡1条の検出に止まっているが、間隙を埋める成果として貴重と言える。

上記の諸施設はいずれも老朽化しており、使命を終えたものも存在することから、近い将来に施設の更新が予想される。既設建物の地下は、大規模な破壊を受けている可能性が高いものの、当地で土地の掘削を伴う工事が立案された場合には、地下情報をできる限り獲得できるよう、埋蔵文化財保護対応を行う必要がある。

【註】

- 1) 田畑直彦(2014)「音楽サークル棟新営工事に伴う予備発掘調査・立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成22年度』, 山口



写真 24 作業風景(北西から)



写真 25 床土層暗渠検出状況(南東から)



写真 26 遺構面河川跡検出状況(北西から)



写真 27 河川跡完掘状況(北西から)



写真 28 河底部土器出土状況(南から)



写真 29 調査区北東壁土層断面(西から)



写真 30 調査区南西壁土層断面(東から)



写真 31 基本層序第7層縄文土器出土状況(南東から)

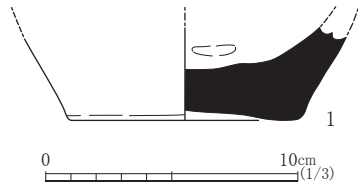


図6 河川出土土器実測図



1-1



1-2



2-1



3-1



4-1



2-2



3-2



4-2

写真 32 出土遺物(土器)

表4 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	河川跡 下層	弥生土器 甕	底部	②(9.1) ③残高3.7	①浅黄色(2.5Y7/3)～ 橙色(5YR6/6) ②灰白色(2.5Y8/2)		0.5～4mmφの砂礫(石英な ど)多く混ざる	
2	基本層序 7層	縄文土器 深鉢か	体部か	残存4×6 器壁 0.6	①②にぶい黄橙色 (10YR7/2)		0.2～3mmφの砂礫(石英な ど)多く混ざる	
3	基本層序 7層	縄文土器 深鉢か	体部か	残存3×4.5 器壁 0.6	①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)		0.2～2mmφの砂礫(長石な ど)多く混ざる	
4	基本層序 7層	縄文土器 深鉢か	体部か	残存2.8×5 器壁 0.7	①②にぶい黄橙色 (10YR7/2)		0.2～2mmφの砂礫(石英な ど)多く混ざる	

2. 基幹・環境整備(ため池改修)工事に伴う予備掘調査

調査地区 吉田構内S・T-9区

調査面積 42m²

調査期間 令和2年1月28日～3月4日

調査担当 横山成己 水久保祥子

調査結果

(1) 調査の経緯(図7、写真33・34)

当計画に関しては、各種工事内容について令和元年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会(4月26日(金)開催。以降、専門委員会と記す)にて施設環境部より説明があった。説明では、ため池2の堤防改修とため池3の埋め立てに大量の土が必要であることから、ため池2東側丘陵の土を広範囲に削平し、工事用土に当てるとのことであったが、ため池2の西側丘陵に横穴墓が分布しており、東側丘陵にも墳墓が分布する可能性を否定できないことから、計画の見直しが提案された。その後現地での確認作業や各種打ち合わせを経て、第4回専門委員会(9月10日(火)開催)、第5回専門委員会(10月4日(金))にて工事計画修正案が提示された。工事用土については、吉田構内に残されている既往工事の残土を活用し、不足分は購入することなどが提案されたことから、当工事に対する埋蔵文化財保護対応は、地下の様相が不明確である牛の放牧地にて計画された、掘削深度の深い3号水路(埋め立てられる3号ため池用の排水施設)を対象に予備発掘調査を実施し、その他の工事については、立会調査にて対応することが諮られ、承認された。

(2) 調査の経過(図8、写真35)

予備発掘調査では、3号水路計画地に幅1.4m×10mの調査区を3箇所(東から第1～3トレンチ)に設定した(図8)。調査は大学センター入試直後から着手する予定であったが、学内工事のスケジュール上、白石構内教育学部附属山口小学校改修工事に伴う埋蔵文化財調査(本書所収)が優先されたことから、1月28日(火)より着手することになった。

なお、事前の打ち合わせにより、予備発掘調査で

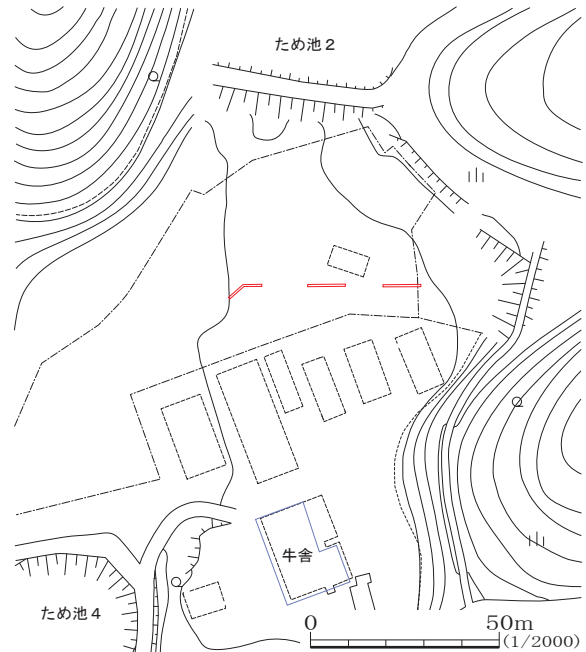


図7 調査区位置図



写真 33 調査地遠景(南上空から)



写真 34 調査地近景(北から)

は改修工事施工業者の協力で重機掘削が行なわれる予定であった。しかし、改修工事に用いている重機のバケットが過大であったことから、全掘削を人力にて行うことになった(写真35)。調査における最大掘削深度は、工事での掘削深度を上限とした。調査の経過は以下の通りである。

1月28日(火)～30日(木) 第1～3トレンチ設定と表土掘削

1月31日(金) 白石構内教育学部附属山口小学校改修工事の埋蔵文化財保護対応のため作業中止

2月3日(月) 第3トレンチ盛土掘削

2月4日(火) 工事中止日のため掘削作業中止 座標測量および測量杭打ち

2月5日(水)～10日(月) 第3トレンチ盛土掘削 旧耕土検出

2月12日(水) 雨天作業中止

2月13日(木) 第2トレンチ盛土掘削

2月14日(金) 雨天作業中止

2月17日(月)・18(火)

白石構内教育学部附属山口小学校改修工事の埋蔵文化財保護対応のため作業中止

2月19日(水)～21日(金) 第2トレンチ盛土掘削 写真撮影

2月25日(火)・26日(水) 工事中止日のため掘削作業中止 第2トレンチ湧水のため北壁倒壊

2月27日(木)・28日(金) 第2トレンチ復旧と埋め戻し 第1トレンチ盛土掘削 写真撮影

3月2日(月)・3日(火) 第3トレンチ清掃 写真撮影 断面図等作成

3月4日(水) 撤収等作業

(3) 基本層序と調査成果(図8・9、写真36～42)

調査地点は、姫山から南東に伸びる山地から西に派生する丘陵斜面に位置する。現地表は緩やかに東から西へ降下しているが、本学の吉田地区統合移転前の土地活用ばかりでなく、統合移転後の土地活用に関しても、詳細な記録が残されていない。

設定した3箇所のトレンチは、ほぼ東西に並んでおり、第3トレンチは管路の設計上「く」字状に折れ曲がっている(図8)。現地標高は第1トレンチが約34m、第2トレンチが33.1m、第3トレンチが32.8m～32.2mを測る。ため池2の東側、西方に延びる丘陵端部は、現状で高低差約3mの切断面が存在していることから、現放牧地全域がある程度削平を受けていることが予想された。

調査の結果、放牧地の削平は著しく、表土下に厚く盛土が施されており、第1トレンチは現地表下1.2m、第2トレンチも現地表下1.2m、第3トレンチは現地表下1.3mで旧耕土を確認した。これらの事実から、当地はかつて棚田として活用されていたことが判明した。

盛土は複数回行われた状況を示しており、各層とも固く締まっていることから、盛土時に強く転圧されたことが分かる。第1・2トレンチの盛土は、その土質から近隣の丘陵削平に伴うものと見られ、第3調査区の盛土にはアスファルトやコンクリート、ブルーシートなどの産業廃棄物が多量に含まれていたことから、当地が棚田として活用されて以降に、本学によって土地造成に関わる残土が持ち込まれたものと想像される。第2トレンチでは、旧耕土直上に泥土が堆積していたことから、耕地放棄後、一定期間ため池など水利に関わる土地活用が行われたと推定される。

いずれの調査区も湧水が著しく、第2トレンチでは作業が中断した5日間に排水が追いつかず、降雨の影響も重なり壁面が崩落した。そのため、土層断面実測は部分的にしか行っていない(図9)。また、館員および作業員の安全確保のため、第1、第2トレンチでは掘削幅を最低限度にとどめている。

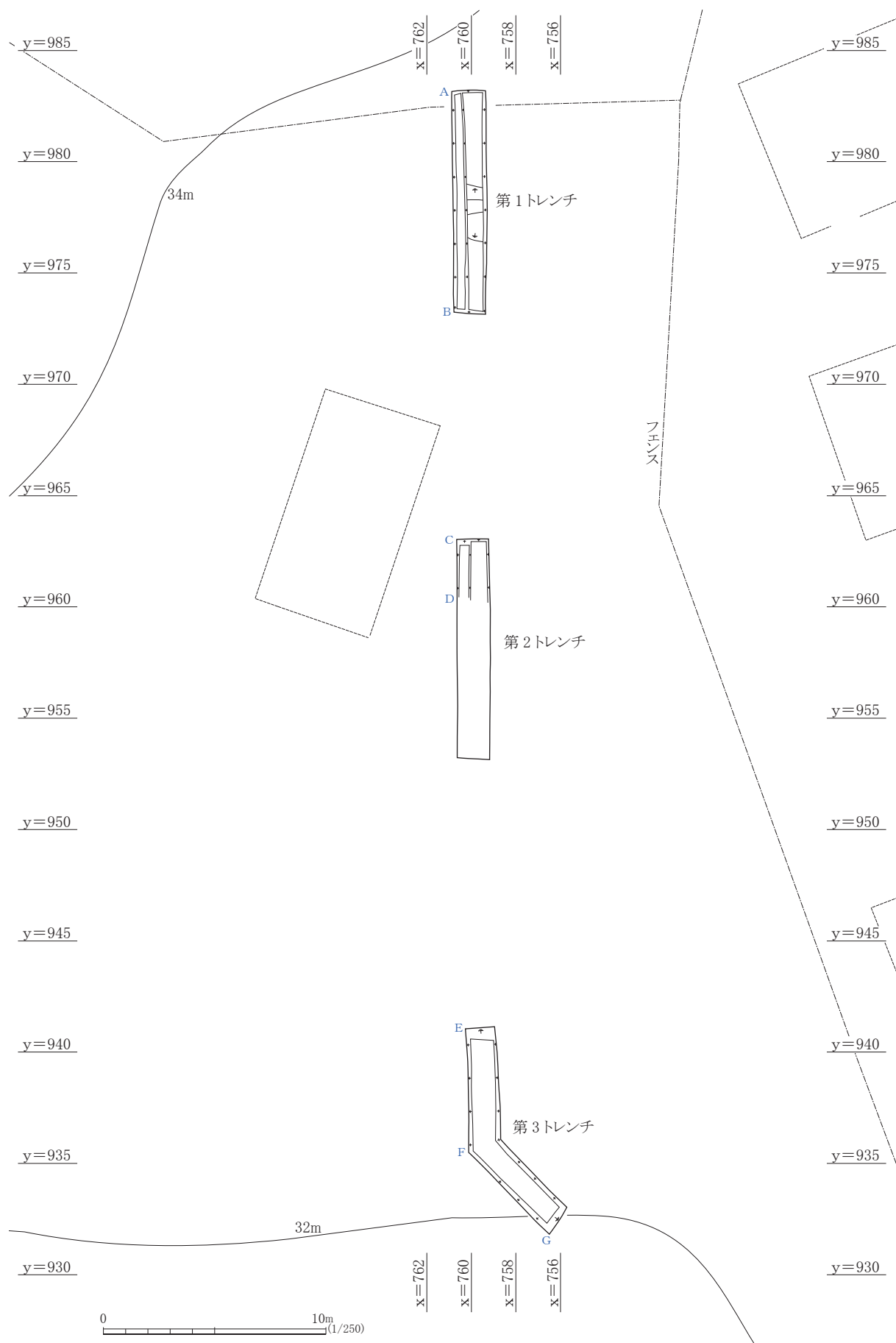


図8 調査区配置図

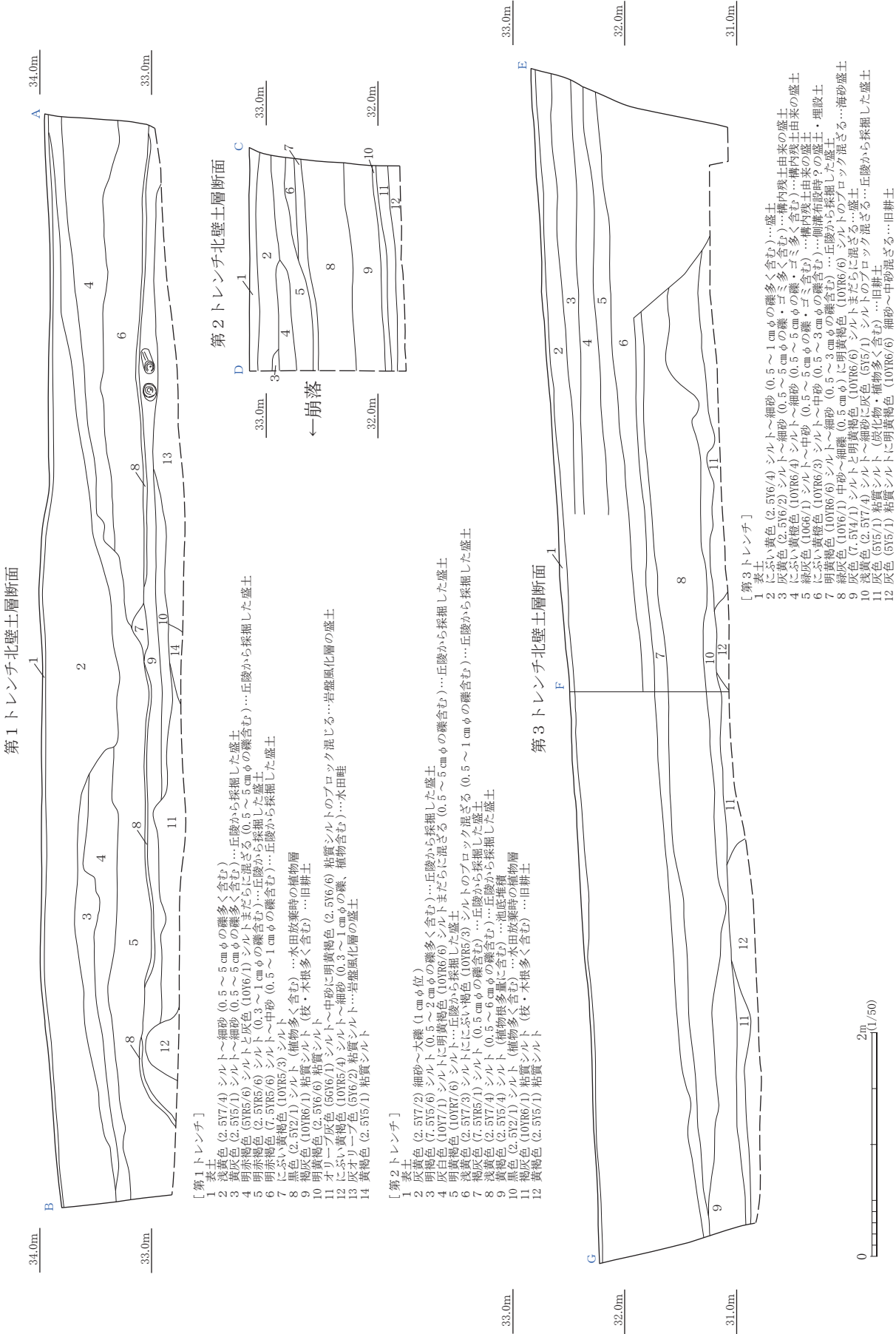




写真 35 第1トレンチ作業風景(北東から)



写真 36 第1トレンチ半裁状況(西から)



写真 37 第1トレンチ北壁土層断面(南西から)



写真 38 第2トレンチ半裁状況(東から)



写真 39 第2トレンチ北壁土層断面(南西から)



写真 40 第2トレンチ西壁土層断面(東から)



写真 41 第3トレンチ完掘状況(東から)



写真 42 第3トレンチ東半区北壁土層断面(南東から)

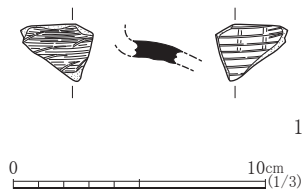


図10 出土土器実測図

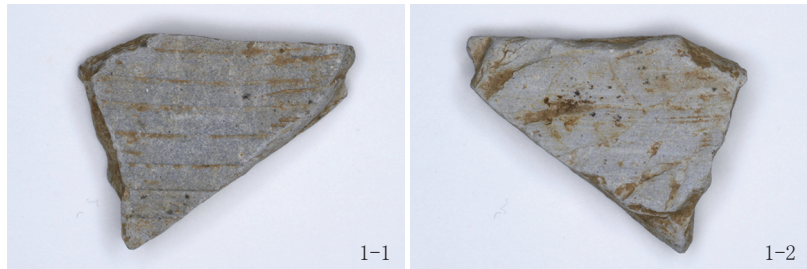


写真 43 出土遺物(土器)

表5 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調	胎土	備考
					①外面 ②内面		
1	第3トレンチ 旧耕土	須恵器 壺瓶類	肩部		①灰白色(2.5Y7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	精緻	

(4) 遺物(図10、写真43、表5)

図示可能な遺物は、第3トレンチの旧耕土より出土した須恵器1点に限られる。1は須恵器壺・瓶類の肩部小片。頸部付近の破片とみられ、外面は縦位の平行文叩き後カキ目が施される。内面は回転ナデが施されているが、同心円文当て具痕が残る。

(5) 小結

調査では、工事計画深度を最大掘削深度として定めたことから、各トレンチとも盛土下の旧耕土を確認するに止まり、地山が確認できていない。

当地がいつ耕地化されたか、という問題に関しては、本学には統合移転時(昭和41年(1966))ばかりでなく、移転後の土地活用記録も残されていないことから、断定できない。国土地理院が公開している航空画像^{註1}を見る限りでは、本学移転前の昭和38年(1963)には、ため池2の東側丘陵が池の南にまで伸びていることを確認できる。この丘陵自体がため池2の堤体の役割を果たしていたと考えられるが、昭和44年(1969)の画像では丘陵が大きく削平を受けている。おそらく、丘陵の削平は移転時に構内の低地を埋め立てるために行われ、その後に農学部附属農場により棚田として活用されたのであろう。

調査地の南方50mにある牛舎敷地^{註2}では、昭和41年(1966)10月から11月にかけて、竪穴式住居跡4棟からなる集落跡が確認されている。当館に残されている調査記録フィルムには、その調査区の北方に西に伸びる丘陵が写り込んでいることから、少なくとも統合移転開始期までは、ため池2の南側丘陵は存在していたことになる。昭和42年(1967)以降、本学には学長を団長とする「山口大学吉田遺跡調査団」が組織され、構内の分布調査を実施しているが、筆者は当丘陵に関する記録や出土遺物に触れたことがない。周囲の遺跡分布状況を見ると、大規模削平を受けた丘陵、特にその南側斜面には、横穴墓をはじめとする墳墓が存在していた可能性が十分に考えられる。本学による無責任な開発行為に悲憤慷慨するも、後の祭りである。

【註】

1) 国土地理院「地図・航空写真閲覧サービス」

2) 横山成己(2021)「吉田遺跡第Ⅳ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報一平成28年度一』, 山口

3. 基幹・環境整備(ため池改修)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内S・T-8区

調査面積 2,810m²

調査期間 令和元年1月30日、3月4日

調査担当 横山成己 水久保祥子

調査結果

予備発掘調査と並行して、ため池改修工事に伴う立会調査も実施した。A地点(図11)は、ため池2より放牧地西縁部に沿って新設された2号水路と、予備発掘調査を実施した3号水路との分水桟設置箇所で、現表土(層厚20cm)下に2層の盛土(層厚40cm)が確認され、以下は岩盤風化土であった(図34、写真44)。2号水路ではいずれも同様の層序が確認され、放牧地の西縁部が、西側丘陵の東縁部を切断し、盛土にて整地されていることが判明した。

ため池2は、江戸時代中期に作成された「地下上申絵図吉田村清図」に「北サコ堤」^{註1}として描かれた堤に該当するとみられることから、ため池2の堤体池側に新設されるピット掘削工事時に土層断面調査を行うことにした(B地点)。ため池2の現状池底は標高32mであり、ピット掘削は標高30mまで掘り下げる計画であった(写真45)。堤体頂部では平成21年度に立会調査を実施しており、少なくとも頂部下1.5mまでは近代の盛土であることを確認している^{註2}。

調査の結果、ため池堤体は、東側丘陵の西への張り出しを利用し、西側丘陵との間に盛土を施し構築されていることを確認した(写真46)。池底下位の堆積(図34の①～⑥)は東西丘陵由来の岩盤風化砂礫層で、間に土壌化層が存在する(写真48)。池底上位1mは土壌化層が幾層も堆積しており、上位は堤体盛土であった(写真47)。また、取水のための木樋なども確認できなかった。現状の堤体は、吉田構内統合移転以降に構築されたと考えられる。

【註】

1) 山口県文書館所蔵

2) 横山成己(2013)「ため池整備工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成21年度—』, 山口

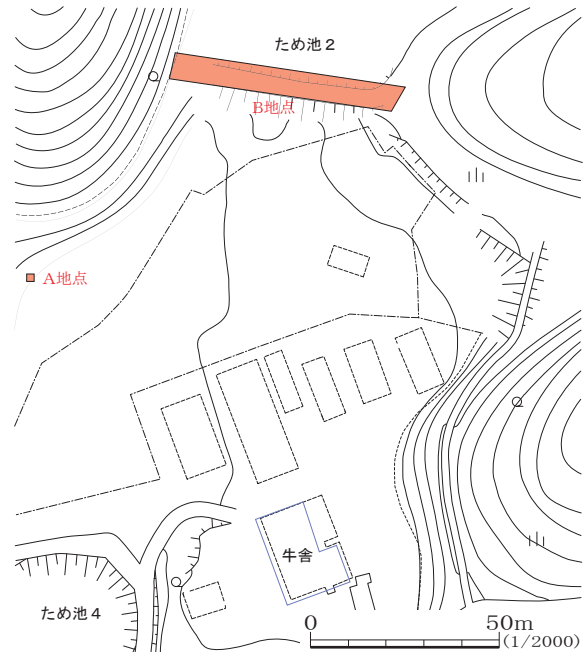


図 11 調査区位置図



写真 44 A 地点土層断面 (東から)

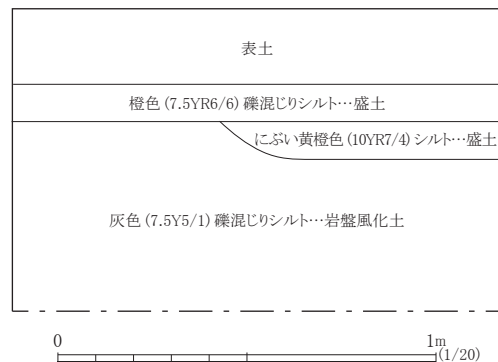


図 12 A 地点土層断面柱状図



写真 45 B 地点調査風景（西から）



写真 46 B 地点北壁東側土層断面（南西から）



写真 47 B 地点南壁上段土層断面（北から）



写真 48 B 地点南壁下段土層断面（北から）

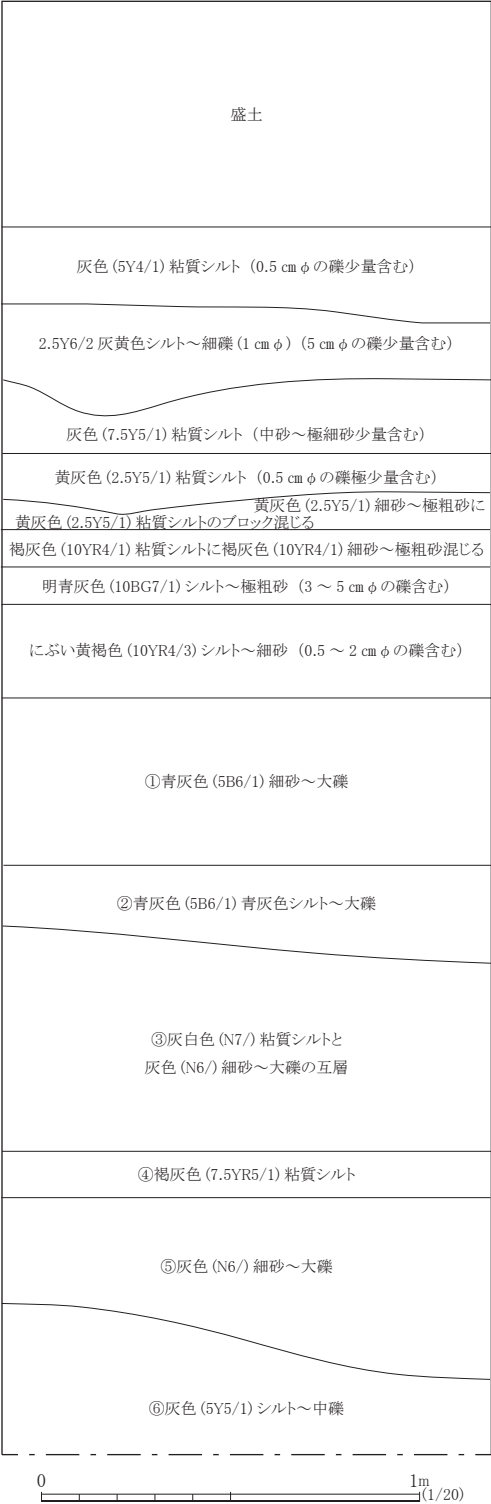


図 13 B 地点土層断面柱状図

4. 基幹・環境整備(ブロック塀対策)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内H-22区

調査面積 23m²

調査期間 令和元年7月1・2日

調査担当 横山成己 水久保祥子

調査結果

平成30年(2018)の大阪北部地震におけるブロック塀災害を受け、吉田構内では同年末よりブロック塀対策工事を実施している。令和元年度はサッカー場の練習用ブロック塀を撤去、新設することになった(図14)が、工事計画地周辺における既往調査^{註1}では、複数の河川跡が確認されていることから、基礎工事掘削時に立会調査を実施することになった。

調査の結果、層厚12cmのグラウンド表土下に層厚18cmの改良土が設けられており、調査区南西部ではその下位が地山であることを確認した(図15、写真49)。調査区の中～北西部では、地山を切り込む橙色礫(1～4cmφ)層と灰色砂礫(0.5～3cmφ)層が検出された(写真50)。河川跡とみられるが、層中に遺物は確認されなかった。

本学統合移転時の昭和42年(1967)に実施された発掘調査では、サッカー場南西部は吉田遺跡第Ⅲ地区南区と命名され、多数の柱穴群とともに、縄文時代晩期から古墳時代まで機能し、木製品や植物種実が遺存した河川跡^{註2}が検出されている。当該調査の正式報告は未だ行えていないが、吉田遺跡の範囲中、遺構・遺物が最も密に分布する地域の一つであることから、今後も慎重な埋蔵文化財保護対応が必要である。

【註】

- 1) 村田裕一・田畑直彦(2004)「基幹・環境整備(外灯新設)に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
川島尚宗・横山成己(2019)「吉田構内南門アプローチ整備工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館—平成26年度—』, 山口
- 2) 小野忠熙(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団, 山口

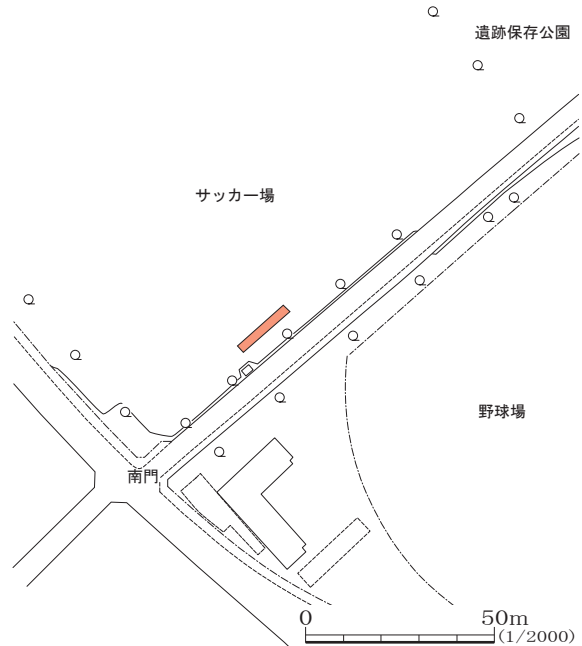


図14 調査区位置図



写真49 調査区南西部地山検出状況(北東から)



写真50 調査区中～北東部河川跡検出状況(南西から)

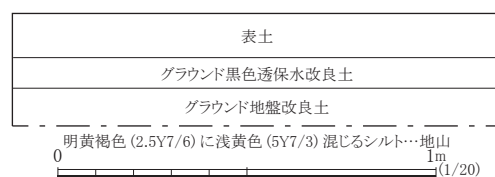


図15 調査区南西部土層断面柱状図

5. 生活排水処理施設解体に伴う排水管支障迂回工事に伴う立会調査

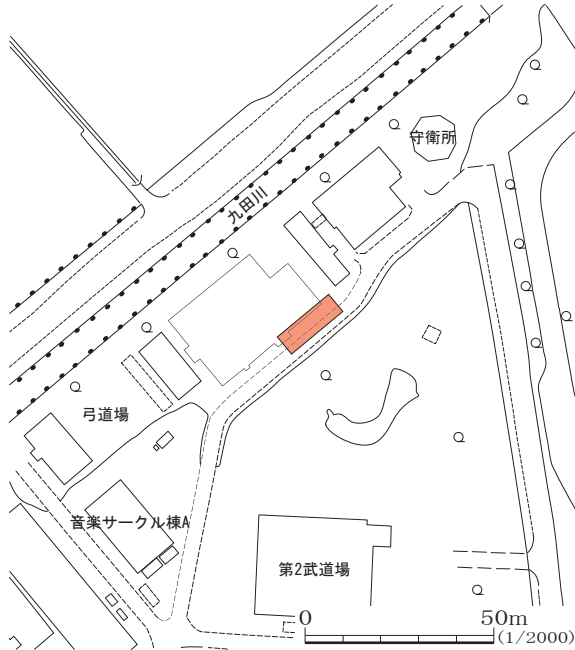


図 16 調査区位置図



写真 51 掘削直後の状況 (南西から)

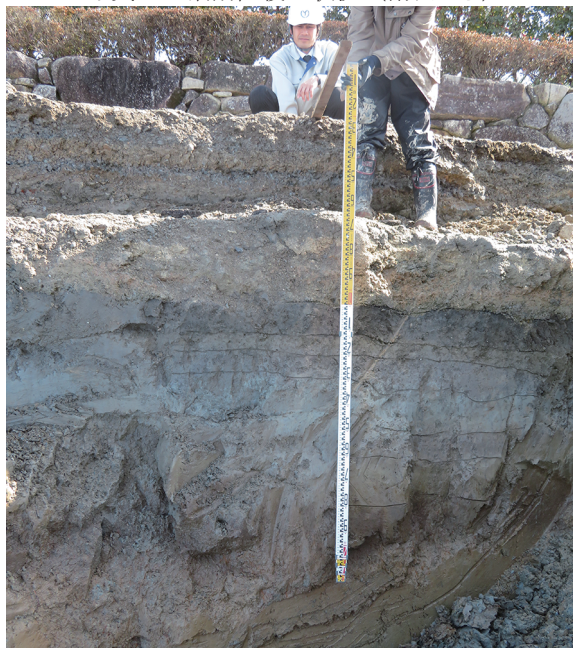


写真 52 南東壁土層断面 (北西から)

調査地区 吉田構内G・H-13区

調査面積 53m²

調査期間 令和2年2月14日

調査担当 横山成己 水久保祥子

調査結果

学生会館(仮称)の新営に伴い、生活排水処理施設が解体されることとなり、工事の支障となる排水管を迂回させる必要が生じた。開発担当部局によると、新設の排水管は既設管および既設柵の余掘内に収まるとの説明であったことから、文化財保護法における埋蔵文化財保護対応は「慎重工事」とした(令和元年度第3回埋蔵文化財資料館専門委員会(8月26日(月)～27日(火):メール審議)にて承認)が、予定掘削深度が現地表下3.6mであったことから、慎重を期し掘削後に現地確認を行った。

現地は予想を超える範囲で掘削を受けており(図16、写真51)、地山が大きく破壊されていることが判明したことから、工事担当者立ち会いのもと、土層断面調査を実施した(図17、写真52)。予備発掘調査成果(本書所収)同様、旧耕土下が地山であり、断面には遺構が遺存しないことを確認した。本例までの土地の破壊は希有であるものの、設備関連工事では計画と実施の不一致が頻出することも事実である。今後はより一層慎重な対応が必要となる。

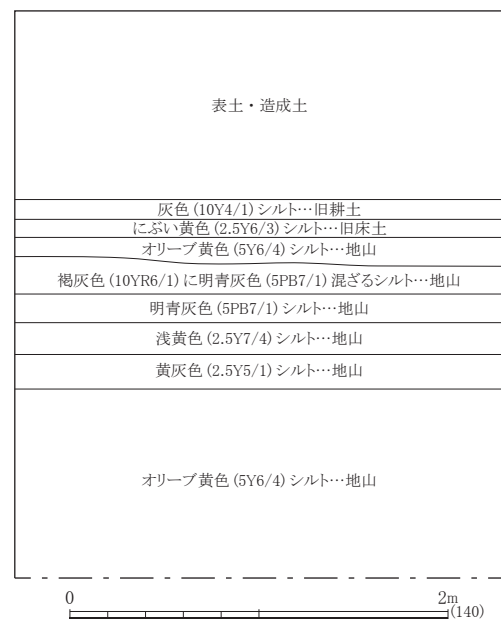


図 17 土層断面柱状図

6. 東門フェンス改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内V・W-17区

調査面積 2.25㎡

調査期間 令和元年8月26日

調査担当 横山成己

調査結果

吉田構内東門の南側には、周囲を金網フェンスで取り囲んだ農学部管理の空閑地^{註1}が存在している(図18)。近隣住民より、フェンスの一部が倒れかかっているとの指摘を受けたことから、開発部局により改修工事が実施されることとなった。

既設の基礎ブロックを再利用する計画であったことから、文化財保護法93条を提出せずに工事が進められたが、開発工事担当部局より、ブロックの再利用が困難で、新に基礎を設ける必要があるとの連絡を受けたことから、緊急に立会調査を行うことになった。

当地点周辺では、実験水田^{註2}周囲で数度の工事立会が実施されているものの、かつて西に隣接する牧草地において農学部により植物工場の建設が計画されたが実現しなかったこともあり、地下の様相が不明確であった。調査の結果、一部で表土下30cmに明黄褐色の地山が検出確された(図19、写真53)ことから、当地点周辺では表土直下が地山であり、多少の削平は受けていると推測されるが、小規模な掘削でも遺構が破壊される可能性が生じることを確認できた。東門自体の老朽化も進行していることも含め、周辺地での将来的な開発工事計画には注意が必要である。

【註】

1) 同地にはかつて農学部教員の実験設備が存在したと聞けが、施設の詳細は不明である。

2) 河村吉行(1983)「農学部附属農場農道改修に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報V』, 山口

横山成己(2019)「農学部附属農場水田排水路工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館一平成26年度一』, 山口

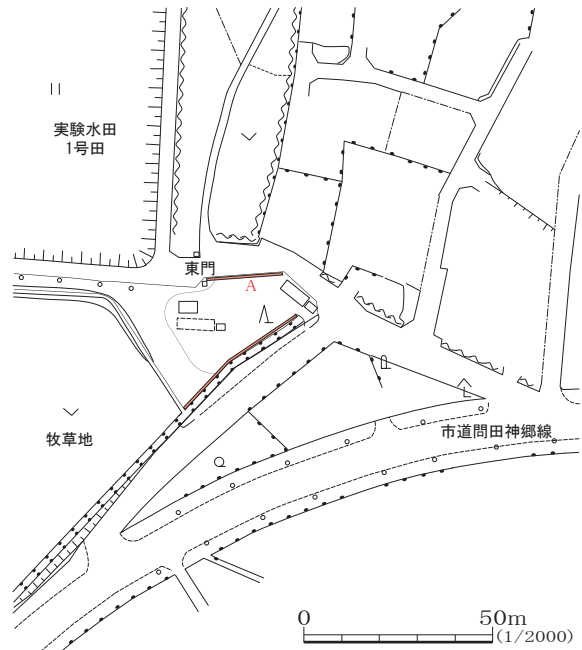


図18 調査区位置図



写真53 A地点土層断面(東から)

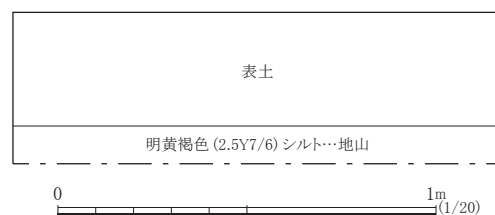


図19 A地点土層断面柱状図

7. 総合研究棟(経済学系)改修工事に伴う立会調査



図 20 調査区位置図

調査地区 吉田構内K-20区

調査面積 15.5㎡

調査期間 令和元年9月19日

調査担当 横山成己

調査結果

吉田構内における学部校舎の改修工事は、平成14年度の農学部校舎に始まり、以降建築年の古い校舎から順次実施されており、経済学部B・C棟を残すのみとなっていた。

平成30年度に至り、該当建物の改修計画が立案されたものの、年度末時点で工事の詳細が不確定であったことから、工事の詳細が決まり次第、当館館長の裁量により埋蔵文化財保護対応を決定することが平成30年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成31年3月29日(金)開催)にて諮られ、承認された。

令和元年の夏に至り提出された具体的な工事計画では、校舎改修においては地下の掘削を伴わないが、経済学部D棟西側自転車置き場周囲の樹木の抜根作業で最大50cm程度の掘削工事が見込まれることから、工事立会にて地下の確認を行うこととなった(図20)。

抜根作業後に現地を確認したが、いずれの樹木も根の張りが弱かったようで、重機による掘削は最大で30cm程度で、いずれも盛土内に止まっており、埋蔵文化財に支障が生じる状況ではないことを確認した(図21、写真54)。



写真 54 土層断面 (東から)

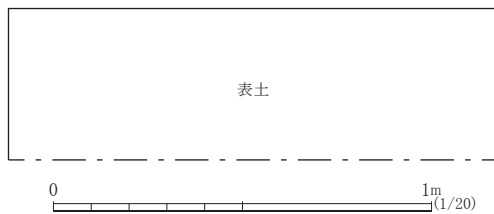


図 21 土層断面柱状図

8. ライフライン再生(電気設備)工事・ライフライン再生(給水設備)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内B・C・D-21区、D・E-20区

調査面積 約169.4㎡

調査期間 令和元年12月16～18日、20・23～26
・28日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯

ライフライン再生(電気設備)工事・ライフライン再生(給水設備)工事に伴い、特別支援学校敷地で立会調査を実施することになった(平成30年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(3月29日(金)開催)にて承認)。

工事は新規に掘削する管路等について掘削を行うもので、掘削範囲は正門から校舎間を中心に広範囲に及んだ。①～⑦工区のうち、①～⑤は給水管、⑥・⑦は電気配管に伴うものである。

(2) ①・②・⑥工区

①・②ルートは既設管とほぼ重複しており、埋蔵文化財に支障はなかった。また、⑥工区は最大で現地表下約140cmまで掘削が行われたが、現地表下約100cmまでが造成土で、100～140cmで明黄褐色(10YR6/6)礫を検出した。

(3) ③工区

多くの箇所で作成前の水田耕土・床土は残存しておらず、主に造成土直下で遺物包含層・遺構・河川を検出した。

1地点では現地表下66cmで河川もしくは溝埋土を確認し、縄文土器片が出土した。2地点では現地表下55cmで黒褐色シルト(遺物包含層か)を確認した。この層は1～2地点の間で認められた。3地点では現地表下61cmで黒褐色シルト(遺物包含層)の落ち込みを確認し、土器片が出土した。4地点では現地表下43cmで黒褐色シルト(遺物包含層)を確認した。5地点では現地表下44cmで杭もしくはピットと考えられる遺構を検出した。6地点では現地表下46cmでピットと考えられる遺構を検出した。7地点では現地表下42cmで杭と

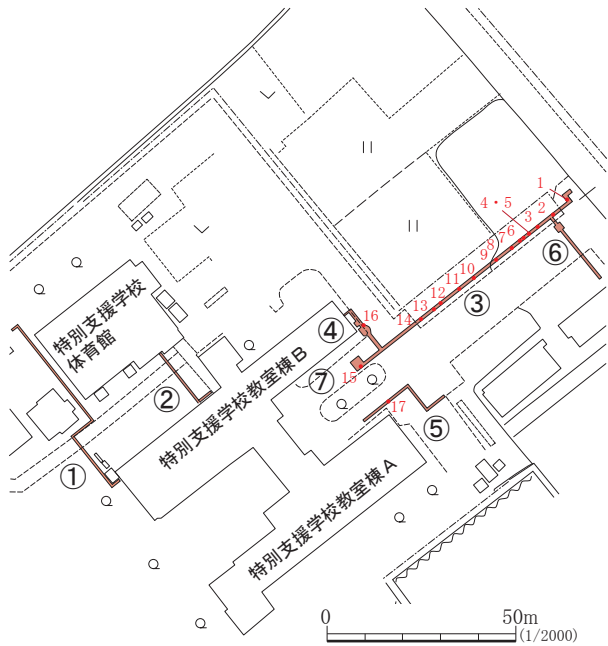


図 22 調査区位置図



写真 55 1地点土層断面(南西から)



写真 56 3地点土層断面(南から)



写真57 6地点土層断面(南西から)



写真58 12地点1土層断面(南東から)



写真59 12地点2土層断面(北東から)



写真60 14地点土層断面(北西から)



写真61 16地点土層断面(南から)



写真62 17地点土層断面(北西から)

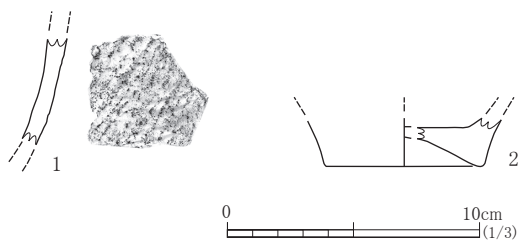


図23 出土遺物実測図



写真63 出土遺物写真

表6 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調	胎土	備考
					①外面 ②内面		
1	1地点 黒褐色粘質土	縄文土器 深鉢	胴部		①暗灰黄色(2.5Y4/2) ②灰色(10Y4/1)	0.1～3mmの砂粒を含む	
2	1～2地点 黒褐色粘質土	縄文土器 深鉢	底部	②(6.3)	①黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～3mmの砂粒を含む	

考えられる遺構を検出した。8地点では現地地表下41cmでオリーブ灰色シルト(遺物包含層か)を検出した。9地点では現地地表下37cmでオリーブ灰色シルト(遺物包含層か)を検出した。10地点では現地地表下48cmで弥生時代以降の遺構面・灰色粗砂(縄文以前の河川埋土か)を検出した。11地点では現地地表下60cmで灰色粗砂(縄文以前の河川埋土か)を検出した。12地点では現地地表下32cmで溝とみられる遺構(幅20cmが2条、幅43cmが1条)を検出した。13地点では現地地表下40cm以下で弥生時代以降の遺構面、縄文以前の河川埋土を確認した。14地点では現地地表下26cmで河川もしくは溝とみられる遺構を検出した。

(4)④・⑤・⑦工区

④工区では、16地点の現地地表下52cm以下で、暗灰色粘質土など遺物包含層もしくは河川埋土と考えられる土層を検出した。⑤ルートのは大半は造成土内の掘削であったが、17地点の現地地表下50cmで、暗灰色シルト(遺物包含層か遺構埋土)を検出し、土器片が出土した。⑦工区では、15地点の現地地表下66cmで時期不明の河川を検出した。

(5)出土遺物

図23-1は1地点黒褐色土出土の縄文土器深鉢胴部。外面調整は二枚貝条痕、内面調整はナデ。2は1～2地点間黒褐色シルト出土の深鉢底部。やや上底を呈する。内外面の調整はナデである。いずれも縄文時代後～晩期であろう。この黒褐色シルトからは敲石も1点出土した。

(6)小結

今回の調査では、特に③工区を中心に遺物包含層・遺構・河川を検出し、1～2地点からは縄文時代後～晩期の土器が出土した。1～2地点では当該期の遺構ないし河川が存在する可能性がある。③工区の南側では平成29年度に実施されたガス管引替工事に伴う立会調査でも現地地表下60cmで遺物包含層とみられる黒褐色砂質土層を検出し、その下位で河川堆積土と思われる砂礫土層が認められている。^{註1}

特別支援学校敷地の正門から校舎間では、現地地表下約40cm程度の掘削で埋蔵文化財に支障が生じる可能性があり、特に注意が必要である。

【註】

- 1) 横山成己(2022)「教育学部附属特別支援学校ガス管引替工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成29・30年度—』, 山口

9. 東アジア研究科・経済学部研究科棟渡り廊下屋根取設工事に伴う立会調査



図 24 調査区位置図



写真 64 調査区全景 (南から)



写真 65 10 地点土層断面 (南から)

調査地区 吉田構内K-21区

調査面積 約9.7 m²

調査期間 令和2年3月17・18日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯

東アジア研究科・経済学部研究科棟渡り廊下屋根取設工事に伴い、立会調査を実施した(令和元年度第2回埋蔵文化財資料館専門委員会(6月27日(木)開催:メール審議)にて承認)。

工事は東アジア研究科・経済学部研究科棟と経済学部多目的棟の間に、渡り廊下の屋根の基礎(平面形90×90cm)を12箇所掘削するもので、現地地表下約90cmまで掘削が行われた。

調査の結果、1～3、7、8地点は全て造成土の範囲内であった。4～6、9、10～12地点では層厚60cm前後の造成土の直下に統合移転前の水田耕土・床土が残存しており、床土の直下、現地地表下66～82cm以下で河川埋土を確認した。このうち、11地点の河川埋土は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質土で、土器片が出土した。

今回検出された河川は、経済学部大講義室敷地^{註1}、経済学部商品資料館敷地^{註2}、経済学部多目的棟敷地^{註3}で検出された河川と一連と考えられる。

【註】

- 1) 河村吉行(1992)「吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』, 山口
- 2) 豆谷和之(2000)「経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』, 山口
- 3) 田畑直彦(2016)「経済学部校舎改修(プレハブ校舎新営)に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XXI』, 山口